指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第47集

平成21年度市内遺跡確認調査報告書

敷領遺跡
大園原遺跡
山王遺跡
森山遺跡

平成22年3月

指宿市教育委員会

例　　言

1．本書は，平成21年8月6日から平成22年3月31日まで実施した鹿児島県指宿市に所在する敷領遺跡・大園原遺跡・山王遺跡・森山遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，指宿市教育委員会で実施した。敷領遺跡・森山遺跡の調査は渡部徹也が担当し，中摩浩太郎・鎌田洋昭の協力を得た。大園原遺跡・山王遺跡の調査は，中摩浩太郎が担当し，渡部徹也・鎌田洋昭が協力した。調査組織は以下のとおりである。

発掘調査主体	指宿市教育委員会		
発掘調査責任者	指宿市教育委員会	教育長	田中　民也
発掘調査担当組織員	指宿市教育委員会	教育部長	屋代　和雄
		社会教育課長	大浦　　誠
		社会教育係長	川路　　潔
		社会教育係主査	東中川睦子
		社会教育係主査	大道　裕子
		社会教育係主査	宮地　主税
		社会教育係主査	池水　拓也
		文化係長	下玉利　泉
		文化係主事	竹内　弘毅
	発掘調査・報告書作成担当	文化係主査	中摩浩太郎
		同上	渡部　徹也
		同上	鎌田　洋昭

発掘調査・整理作業員　林　美加子，堂薗眞弓，馬場シズ子，上玉利孝志，吉元　妙，堀口ツユ子，下拂喜代志，濵田文雄，吉満淳子，東　富子，立石弥生，立石安容，鎌田真由美

3．本書の編集，図面作成，写真撮影は，中摩浩太郎・渡部徹也が主に行い鎌田洋昭の協力を得た。

4．調査，及び報告書作成に要した経費3,000,000円のうち，50%は国，10%は県からの補助を得た。

5．図中に用いられている座標値は，国土座標系第Ⅱ系に準ずる。

6．遺物観察表，遺物実測図，遺構図の表記凡例は，『橋牟礼川遺跡Ⅲ』(1992，指宿市教育委員会）と『水迫遺跡Ⅰ』(2000，指宿市教育委員会）に準ずる。観察表の特殊な表記については下記のとおりである。

土器の混和材【カ：角閃石，セ：石英，ウ：雲母，金：金雲母，白：白色粒，黒：黒色粒，赤：赤色粒】

土器部位・法量【口：口縁部，口縁部径，肩：肩部，肩部最大径，胴：胴部，胴部最大径，底：底部，底部径】

調整【内：内面，外：外面，口唇：口唇部，突：突帯部，底：底面，脚内：脚台内面，脚端：脚台接地面】

色調【内：内面，外：外面，肉：器肉】※地層・遺物のマンセル値は，土色計SCR-1を使用し測色した。

7．敷領遺跡の調査については，文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」『火山噴火罹災地における文化・自然環境復元』の一環で，お茶の水女子大学鷹野光行教授を研究代表者とする計画研究『わが国の火山噴火罹災地における生活・文化環境の復元－九州を中心に－』の調査研究プロジェクトと共同し，鹿児島大学新田栄治教授，東京工業大学亀井宏行教授，お茶の水女子大学，鹿児島大学，東京工業大学の学生諸氏の指導・協力を得た。記して感謝申し上げたい。

8．発掘調査で得た全ての成果については，指宿市考古博物館時遊館ＣＯＣＣＯはしむれで保管し，活用する。

目　　次

敷領遺跡編

第１章　経緯と調査概要 …… 1
　第１節　遺跡の位置と環境 …… 1
　第２節　調査の履歴と調査に至る経緯 …… 1
第２章　遺跡の層序 …… 2
第３章　調査区の選定と調査の概要 …… 5
　第１節　調査区の選定 …… 5
　第２節　調査の概要 …… 5
第４章 調査成果 …… 6
　第１節　層位について …… 6
　第２節　遺構について …… 6
　第３節　遺物について …… 11
　第４節　まとめ …… 13
　第５節　敷領遺跡地中レーダ探査 …… 16

大園原遺跡編

１．遺跡の概要 …… 18
２．調査の結果 …… 18

山王遺跡編

１．調査に至る経緯 …… 22
２．調査の結果 …… 22

森山遺跡編

１．調査に至る経緯 …… 24
２．調査の結果 …… 24

■敷領遺跡編■

第１章　経緯と調査概要

第１節　遺跡の位置と環境

敷領遺跡は，指宿市十町小字敷領，及びその周辺に広がる弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡である。

遺跡は，指宿市街地が広がる火山性扇状地のほぼ中央，海抜４～10m前後の標高にあり，火山災害遺跡として知られる国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡の北北西約２kmの地点に位置する。敷領遺跡の立地する扇状地は，北側を流れる二反田川と南側を流れる柳田川の両小河川に挟まれ，海岸に向かって緩やかに傾斜している。

第２節　調査の履歴と調査に至る経緯

敷領遺跡での調査履歴は以下のとおりである。

年　度	調査目的	内　　容
平成７年度	遺跡範囲確認調査	874年３月25日の開聞岳噴出物「紫コラ」で埋没した水田跡などを検出。
平成８年度	市営・県営住宅の建替えに伴う発掘調査	874年の水田跡を面的に確認。奈良～平安時代の掘立柱建物跡，総柱建物跡等の遺構や多量の須恵器・土師器，墨書土器（「糒」・「智」）を発見。古墳時代の竪穴式住居跡，弥生時代のベッド状遺構を伴う竪穴式住居跡を検出。
平成９年度	温泉タンクの設置に伴う発掘調査	874年の水田跡と奈良～平安時代の柱穴群を確認。
平成10年度	市営・県営住宅の建替えに伴う発掘調査	水田跡，奈良～平安時代の建物群の広がりを確認。７世紀第４四半期の開聞岳火山灰「青コラ」で埋没した円墳「弥次ヶ湯古墳」を発見。

平成16年度には，お茶の水女子大学鷹野光行教授を研究代表者とする科学研究費補助金「特定領域研究」『わが国の火山噴火罹災地における生活・文化環境の復元－九州を中心に－』の研究プロジェクトに指宿地域が選定されたことから，以下のように敷領遺跡の確認調査を実施した。なお，下表で「大学」と表記したものは，お茶の水女子大・鹿児島大学の共同調査である。

年　度	調査主体	内　　容
平成17年度	東京工業大学	平成８年度調査地点南側で地中レーダ探査：874年の開聞岳噴火で埋没した広範囲にわたる水田跡と真北方向を向いた畔の配置を確認。
	市教委・大学	２箇所のトレンチを設定，埋没水田の発掘調査を実施。
平成18年度	市　教　委	平成10年度調査地点北側において確認調査を実施。畠跡を検出。
平成19年度	市　教　委	西側一帯の状況把握のため，平成18年度調査地点の約50m西で確認調査を実施。大型の畦１条（大区画畦の可能性あり）と小型の畦２条を検出。
	大　　学	市教委調査地点の西側調査区（楠田地点）で畠跡を検出。
平成20年度	市　教　委	874年３月25日の開聞岳噴出物「紫コラ」で埋没した道跡等を検出。
	大　　学	874年３月25日の開聞岳噴出物「紫コラ」で埋没した掘立柱建物跡を検出。

敷領遺跡地内での平成７年度以降の各調査で，この地域において874年段階で大規模な水田が造営されていたことがわかってきた。平成20年度は，このような大規模な生産地を経営した集団の集落所在地を確認するため，５地点において確認調査を実施し建物遺構の存在を確認するに至った。集落範囲やその詳細を把握することが今後の課題である。

参考文献

『橋牟礼川遺跡Ｘ』1996　指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(22)指宿市教育委員会
『敷領遺跡』1997　指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(25)指宿市教育委員会
『敷領遺跡Ⅱ　弥次ヶ湯古墳』1999　指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(31)指宿市教育委員会
文部科学研究費補助金特定領域研究「わが国の火山噴火罹災地における生活・文化環境の復元」による発掘調査報告書『鹿児島県指宿市　敷領遺跡の調査』2006　お茶の水女子大学文教育学部博物館学研究室・鹿児島大学法文学部比較考古学研究室
『平成17年度市内遺跡確認調査報告書』2006　指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(39)指宿市教育委員会
『平成18年度市内遺跡確認調査報告書』2007　指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(41)指宿市教育委員会

『平成19年度市内遺跡確認調査報告書』2008　指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(43)指宿市教育委員会
文部科学研究費補助金特定領域研究「わが国の火山噴火罹災地における生活・文化環境の復元」による発掘調査報告書『鹿児島県指宿市　敷領遺跡（楠田地点）の調査』2007　お茶の水女子大学文教育学部博物館学研究室・鹿児島大学法文学部比較考古学研究室
『平成20年度市内遺跡確認調査報告書』2009　指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(44)指宿市教育委員会

第２章　遺跡の層序

敷領遺跡の層序は，橋牟礼川遺跡の基本層序とほぼ同様である（図２）。ただ，開聞岳火山灰層については

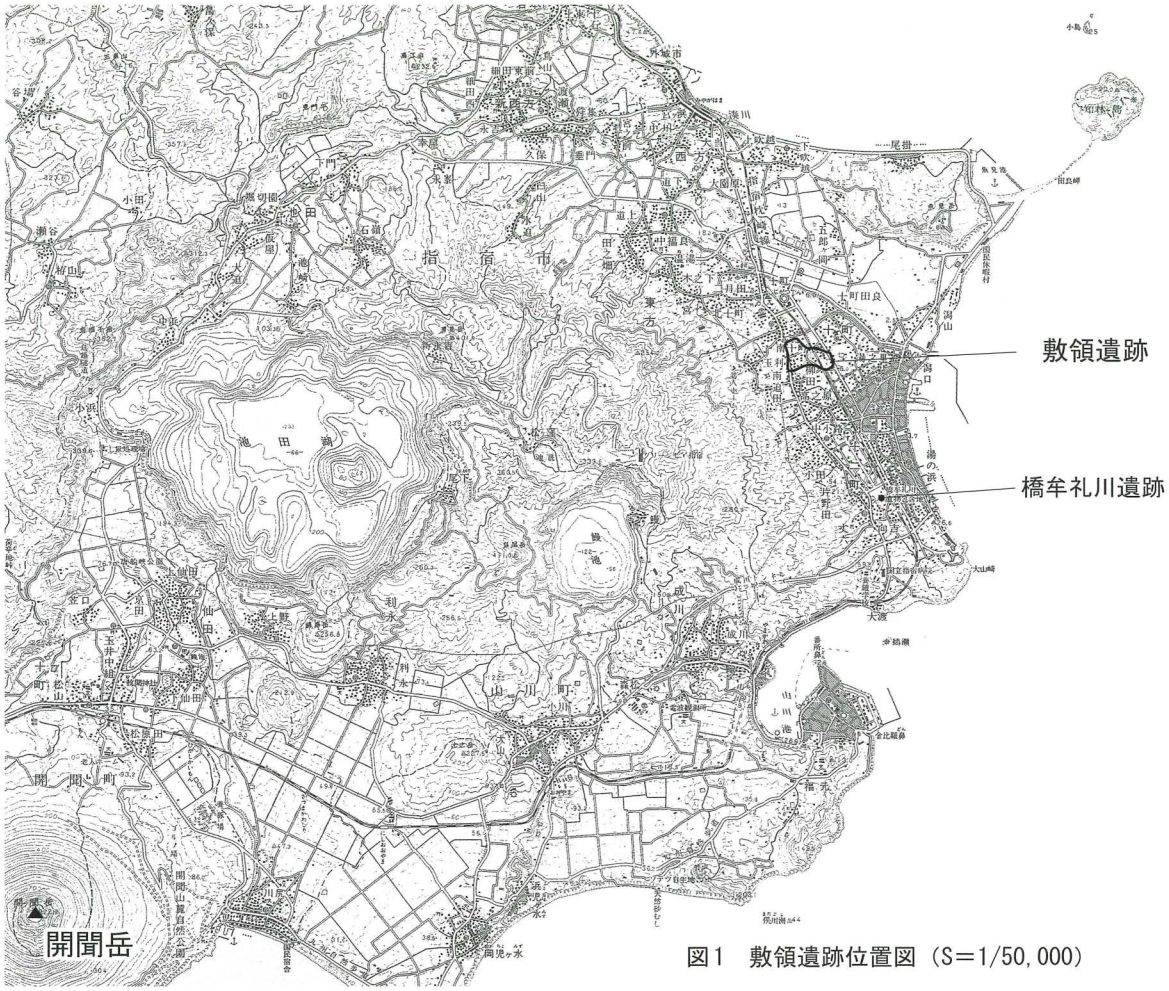


図１　敷領遺跡位置図（S＝1/50,000）

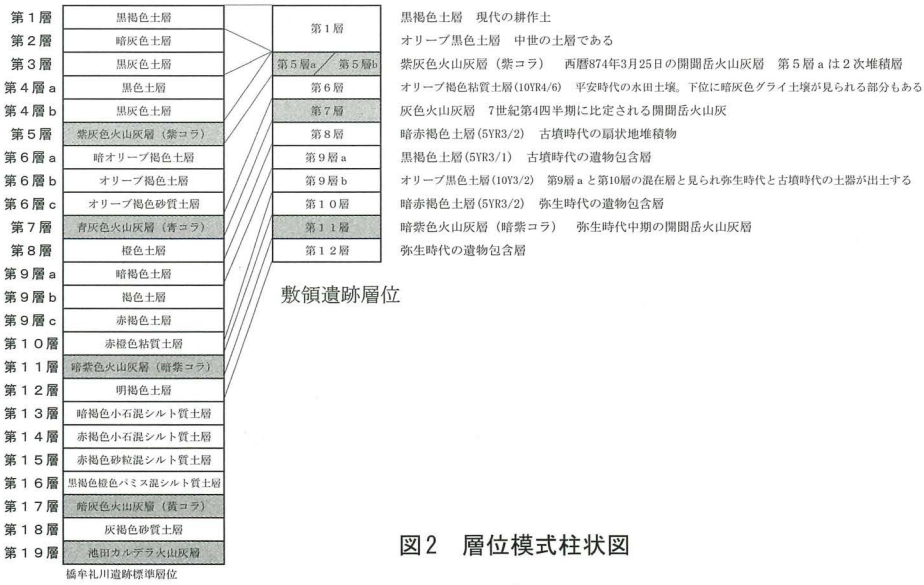


図２　層位模式柱状図

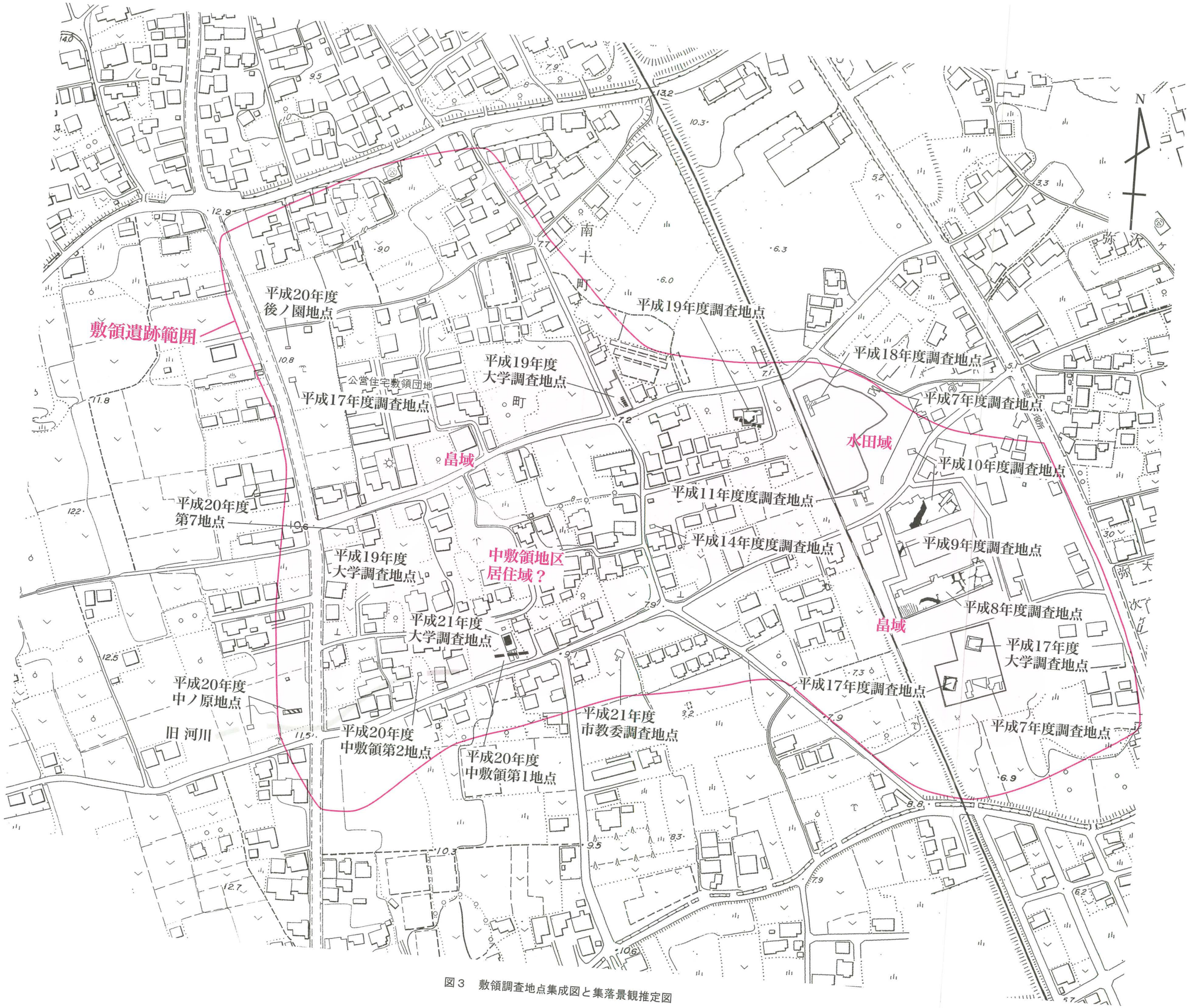


図３　敷領調査地点集成図と集落景観推定図

降灰範囲の中心部分から北にやや外れていることもあり，堆積厚が橋牟礼川遺跡に比べ薄い。同時に，874年3月25日の噴火による降下火山灰堆積層（通称「紫コラ」）では，二次堆積物が発達している場合が多い。調査地点における細かな特徴については，調査成果の中でふれる。

第３章　調査区の選定と調査の概要

第１節　調査区の選定

これまでの調査によって，敷領遺跡では，874年段階で東側のより低い土地に水田が造営されていることが判ってきた。そこで，20年度においては，集落域についての情報を得るため，遺跡内のやや標高が高い西側一帯に注目し確認調査を実施，敷領遺跡中敷領第１地点では874年の開聞岳の火山災害で埋没した建物跡とその南側をはしる道跡（片側に溝状遺構を伴う）を検出した。この調査成果を踏まえ，道跡が直線的にのびると仮定し，その延長線上で調査可能な土地を選定し，本地点を調査することとなった。

第２節　調査の概要

東京工業大学が行った地中レーダ探査結果をもとに4.5×5mのトレンチを設定した。地中レーダ探査の結果については後述する。紫コラの直下からは，道跡ではなく平面が方形を呈する壇状遺構と土坑が検出された。壇状遺構の周囲には紫コラの最初の降下物である火山礫が堆積していたが，壇状遺構の高まりの範囲には火山礫が堆積していなかった。遺構中央には炉跡があり，柱穴とみられる浅い窪みが５基確認された。

壇状遺構の高まりの部分はほぼ水平であり，その範囲のみ火山礫が周辺に流出したとは考えにくい。炉や柱穴

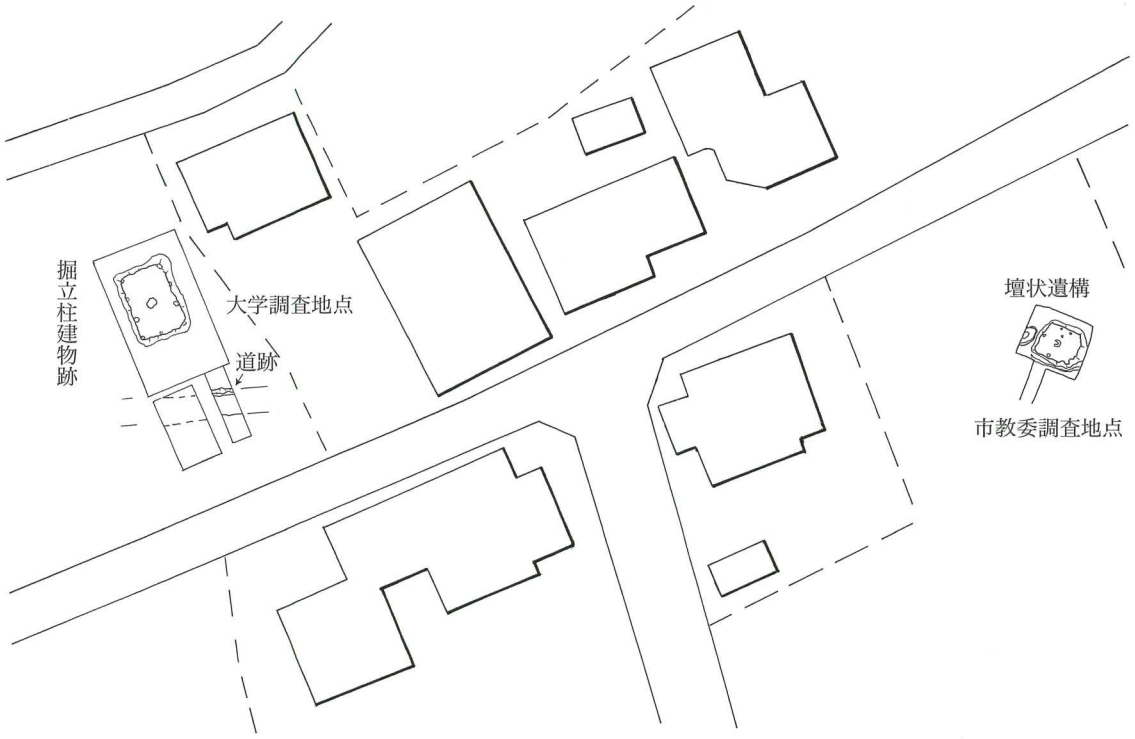


図４　平成21年度　調査地点

とみられる浅い窪みの存在から，壇状遺構は上屋を伴うものと想定される。遺構の状況と紫コラの堆積状況は火山礫の降下時には屋根状の構造物があったため火山礫が堆積せず，その後の火山灰降下時には，屋根状の構造物失われ火山灰のみが堆積した可能性を示唆している。上屋の滅失が噴火の影響によるものか否かは判然としないが，埋没建物跡の検出状況と比較しても，掘立柱建物等の建築物に比べると簡易な構造物であったものと推定される。

第４章　調査成果

第１節　層位について

調査区の層位については図６に示す。なお，これまでの敷領遺跡の報告書にならい橋牟礼川遺跡標準層位に準じて記述したい。

第１層は表土である。現地表から50cm前後の堆積が見られる。過去には住宅があり，また，畑としても利用されたこともあって撹乱を受けている。

表土下には，中世の時期に該当する黒色の第４層が40cm前後の厚さで堆積する。下部はやや黒灰色を帯びる。遺物は出土しなかった。また，下層の紫コラ上面においても第４層を埋土とする遺構は確認されなかった。

第５層は紫コラである。細粒・粗粒の火山灰が30cm前後の厚みをもって互層をなし堆積している。紫コラは874年及び885年の噴出物の総称であるが，間層を挟んでいないこともあり弁別は困難であった。北壁において明瞭に区分できる箇所も見られたが（図６参照），上位に堆積している火山灰が885年の降下物であるとの査証はない。

なお，紫コラ最下層には最初に降下してきた火山礫が堆積しているが，壇状遺構上面にはこの火山礫がみられなかった。土坑内部では火山礫の上位に明紫色を呈するシルト質火山灰の２次堆積が確認された。

第２節　遺構について

（１）壇状遺構

平成20年度の調査で確認された道跡の延長部分を確認する目的で本地点に調査区を設定したが，紫コラの直下からは道跡ではなく方形の壇状遺構が検出された。

遺構の平面の規模はおよそ3.5×3.5ｍの大きさである。北西と南西のコーナーはほぼ90度を測るが，北東と南東のコーナーは丸みをおびる。北辺については，先行トレンチＣの断面に盛土の痕跡が見られなかったことから，旧地形を掘削して高まり部分を作り出しているものと思われる。西辺の土壌も北辺と同様であるため，旧地形を掘削して高まり部分を作り出しているものと思われる。北辺と西辺の傾斜は約30度を測る。斜面上面にも激しい凹凸等は見られず，良好な状態で残存している。

南辺・東辺の中央付近までは，溝を掘って方形の区画を形成している。壇状遺構の高さは，北辺では約15cm，西辺では５～８cmである。

東辺については，北辺・西辺に比べて壇状の高まりから調査区外に向けてなだらかに傾斜するが，この違いが遺構の残存状況の良否によるものかは判断し得ない。南辺に設けられた溝は５cm前後と浅く，西側から東側に向けて緩やかに傾斜している。

炉跡南側の土壁近辺から南側，特に溝を含めその周辺の土壌は，他の部分に比べて柔らかく赤色に変色した土壌やカーボンを多く含む。先行トレンチを設定し断面を確認したところ，南西コーナー付近では，もともとの６層の上位に赤色の土壌ブロックやカーボンを含むにぶい黄色～黄褐色の土壌が５cm程度堆積していた（先行トレンチＡ　写真９）。南西コーナーの南側一帯，溝の上場も同様の土壌の堆積が見られた。

壇状遺構のほぼ中央には，北・東・南側に土壁をもつ楕円形の炉跡がある。土壁は橙色から明褐色を呈する粘質の土壌で，残存する高さは10cm程度である。紫コラ掘削中にすでにこの部分で同色の円形にめぐる土壌があった（写真４）。当初遺構と認識するに至らず掘り下げてしまったことから，もともとはもっと高かったものと推定される。炉内には赤色に変色した土壌やカーボンが確認された。

この炉跡を点対称とするように，北辺と南辺で浅いピットが検出された（Ｐ１とＰ２）。また，Ｐ１とＰ２を結んだラインに直行する形で西辺からＰ４が，Ｐ１の東側からＰ３，Ｐ５の２基のピットが検出された。ピットはいずれも３～５cm程度と浅い。

これら付帯遺構が存在する壇状遺構上面には火山礫が堆積しておらず，フォール・ユニットを形成する紫コラの火山灰層が直接遺構を被覆している状況であった。

（2）土坑

壇状遺構の西側に長径約 1.7 m，短径 0.95＋α m，深さ約 30cm の楕円形の土坑を確認した。壇状遺構と切り合うことなく近接した場所に設けられているため，壇状遺構に付随するものと推定される。土坑の最下層には火山礫が堆積していた。その上位にはシルト質火山灰が堆積し，さらにその上位に紫コラの火山灰層が堆積していた。

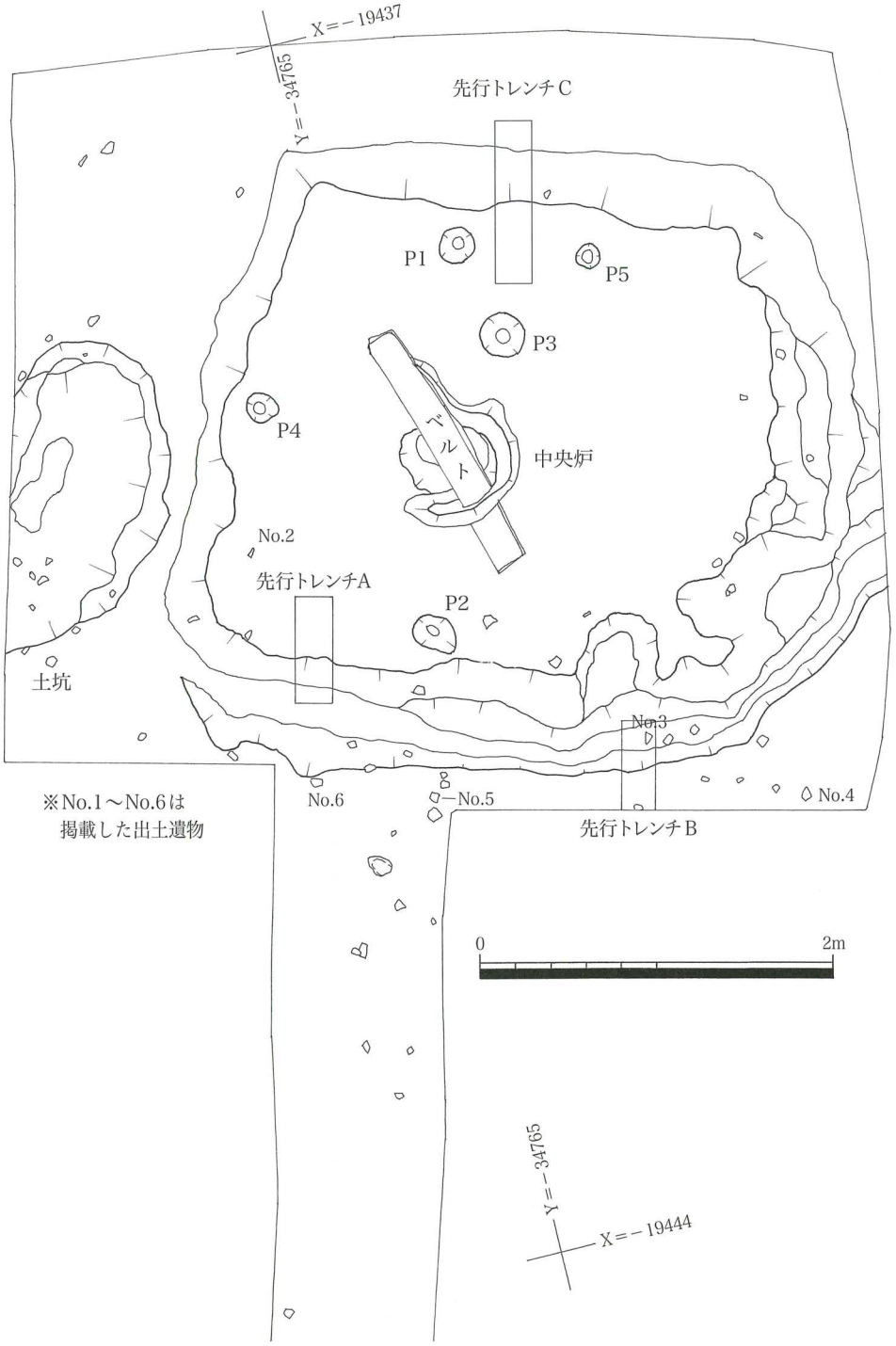


図5　遺構配置図（S＝1/40）

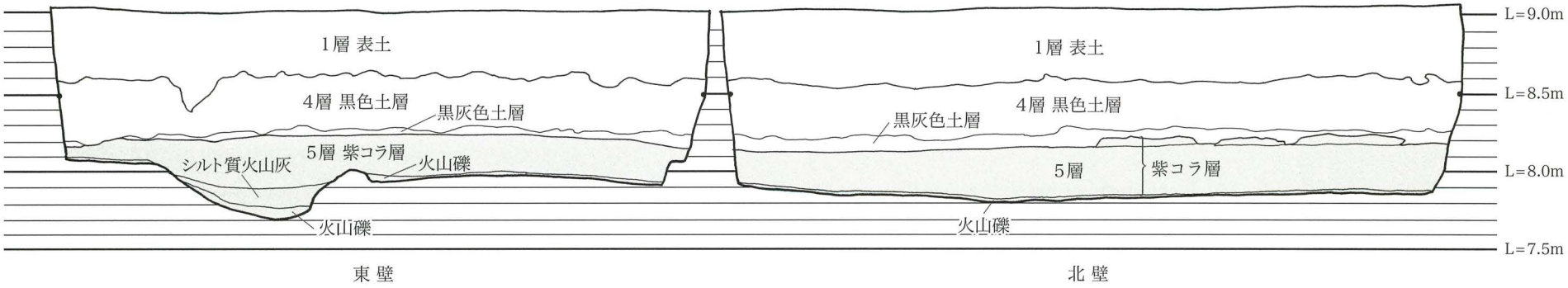


図6 層位断面図（S=1/40）

図7　壇状遺構　平面図・断面図（S=1/20）

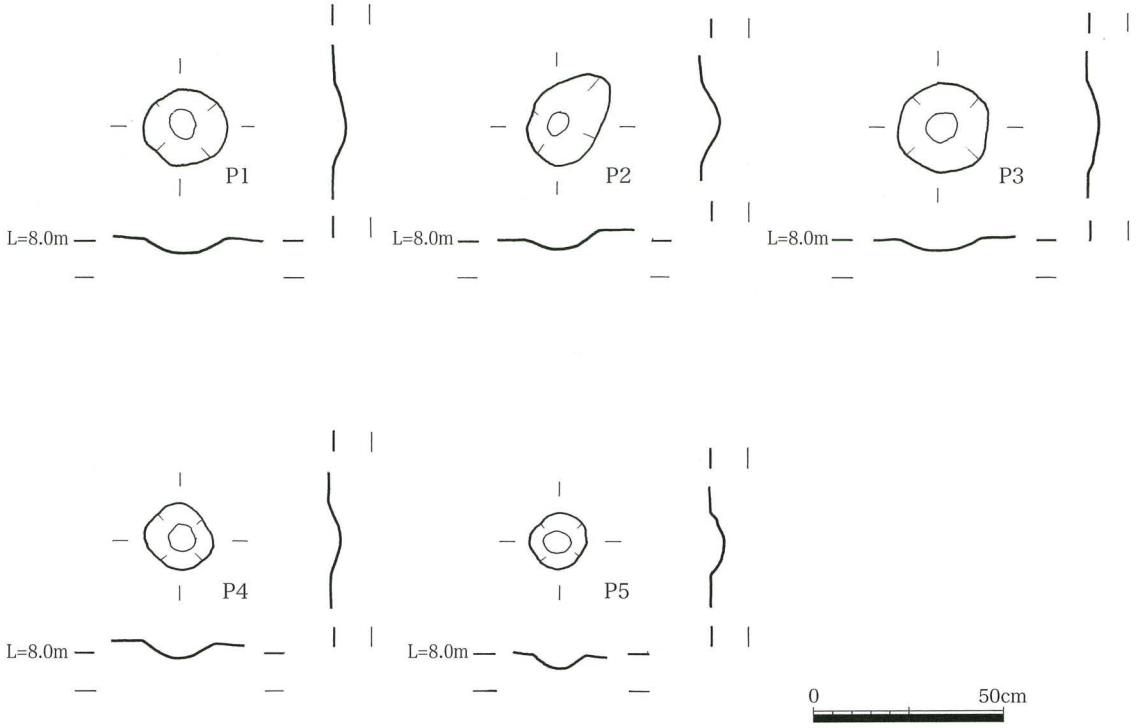


図8　ピット 平・断面図（S＝1/20）

第３節　遺物について

（１）遺物出土状況

紫コラ直下で 59 点の遺物を確認したが，いずれも破片である。壇状遺構の縁辺付近，特に東側から南側にかけて多く出土する傾向が見られる。溝の南側に多く分布していたが，調査区内における出土状況からは，遺物分布において特徴は見出せない。土坑内部の斜面からも数点の遺物が出土したがいずれも細片であった。

出土した遺物のうち，口縁部の破片６点をピックアップし図化した。

（２）出土遺物

No. １は，一般遺物として取り上げた甕形土器の口縁部である。口唇部は丸みを帯びやや外反する。丸底を呈する甕形土器と推定される。

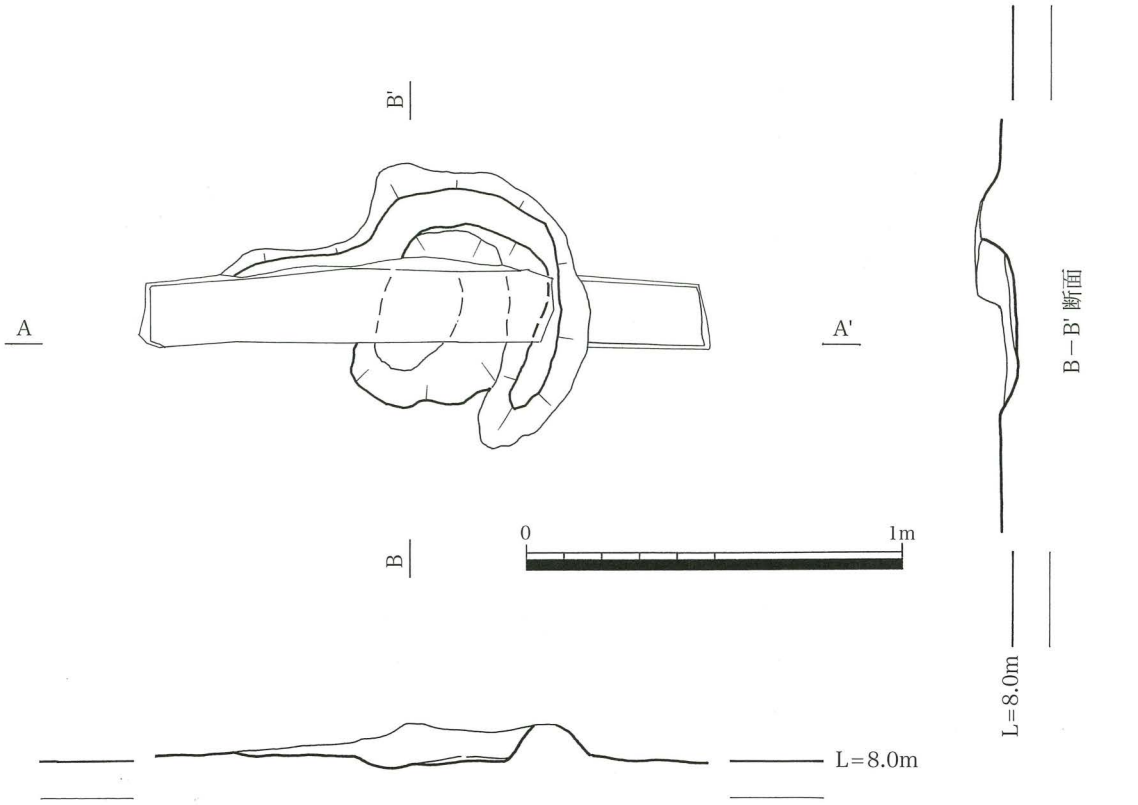
No. ２は，成川式土器の甕形土器の口縁部である。口縁部はほぼ直行するが口唇部付近でわずかに内湾する。口唇部端部は平坦となる。敷領遺跡や橋牟礼川遺跡では，8世紀代まで成川式土器の甕形土器が残存することが知られている。本資料は，壇状遺構の床面から出土した。

No. ３は，須恵器の坏の口縁部である。器壁が薄く口縁部がわずかに窪む。口唇部は丸みを帯びる。

No. ４は，土師器の坏の口縁部から底部の破片である。底部は残存部位が小さく高台の有無については判断し得ない。

No. ５は，須恵器の坏の口縁部である。器壁が薄く口縁部下部がわずかに窪む。口唇部は丸みを帯びわずかに外反する。

No. ６は，須恵器の坏の口縁部である。器壁が薄く口縁部下部がわずかに窪む。口唇部は丸みを帯びわずかに外反する。



A－A' 断面

中央炉平・断面図（S=1/20）

A－A' 断面

土坑平・断面図（S=1/20）

図9　中央炉及び土坑 平・断面図（S＝1/20）

図	取上げ	層位	種別	器種	残存法量(cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	その他
1	一般	6	土師器	甕形土器	破片	口縁部	7.5YR4/1	5YR5/3 7YR6/4	7.5YR5/2	−	微砂粒を含む	セ・白・黒	内：ナデ 外：工具によるナデ 口唇：ヨコナデ	焼成良好 傾きギモン
2	59	6	成川式土器	甕形土器	破片	口縁部	2.5YR6/3 5YR6/2	10YR7/2	7.5YR6/3	−	砂粒・細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	内：ナデ 外：工具ナデのちナデ 口縁：ナデ	焼成良好 傾きギモン
3	11	6	須恵器	坏身	破片	口縁部	10YR6/3	10YR7/2	10YR5/2	−	微砂粒を含む	黒	内：回転ナデ 外：回転ナデ 口縁：回転ナデ	焼成良好 傾きギモン
4	12	6	土師器	坏身	破片	口縁部～底部	7.5YR6/4	5YR5/3 10YR5/2	7.5YR5/2	−	細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	内：回転ナデ 外：回転ナデ 口縁：回転ナデ	焼成良好
5	56	6	須恵器	坏身	破片	口縁部	5YR6/1	10YR7/2	5YR6/1	−	微砂粒を含む	黒・白	内：回転ナデ 外：回転ナデ 口縁：回転ナデ	焼成良好 傾きギモン
6	46	8	須恵器	坏身	破片	口縁部	10YR5/2	7.5YR5/2	2.5Y5/1	−	微砂粒を含む	白・黒	内：回転ナデ 外：回転ナデ 口縁：回転ナデ	焼成良好 傾きギモン

表１　遺物観察表

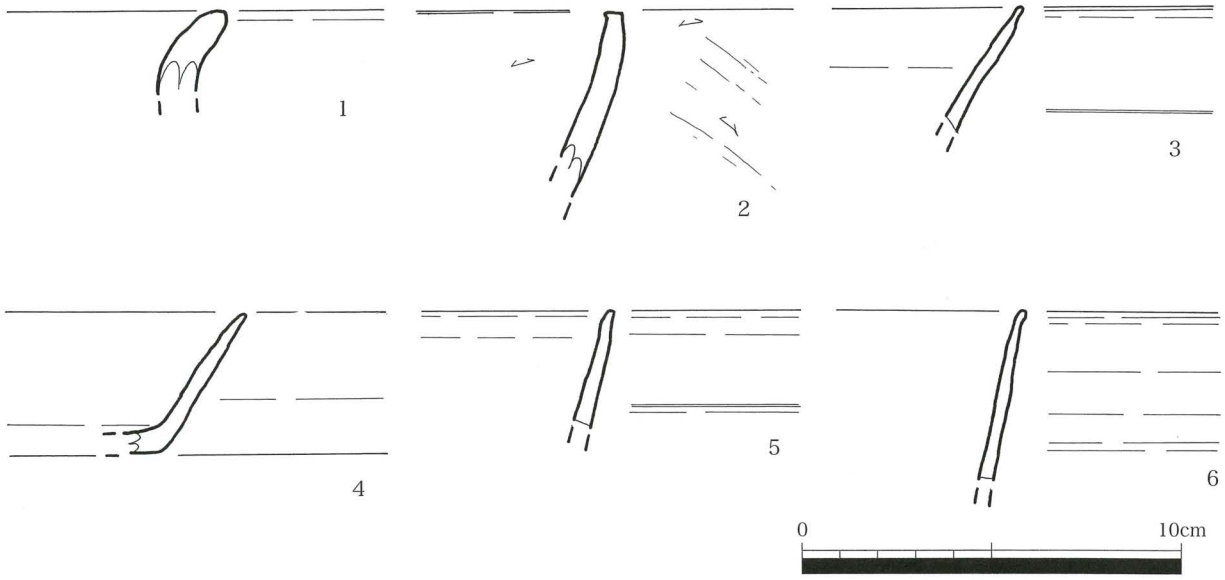


図10　出土遺物実測図（S＝1/2）

第４節　まとめ

平成 20 年度，お茶の水女子大学・鹿児島大学の発掘調査で紫コラによって埋没した掘立柱建物跡が確認され，中敷領地区が周辺に営まれている畠・水田の担い手たちの居住域である可能性がでてきた。その成果に続き，今回も建物遺構と見られる壇状遺構が検出され，その可能性が高まったものと思われる。

壇状遺構は，先述のとおり，筒状の土壁をもつ炉を遺構のほぼ中央に有すること柱穴とみられる浅いくぼみがあることから簡易的な上屋構造を伴った建物跡と推定される。その性格について断定はしえないものの，炉の構造，壇状遺構内外にみられる焼土やカーボン，近接して設けられた土坑の存在などから，例えば鍛冶等の作業が行われた「作業場」の可能性を想定しておきたい。

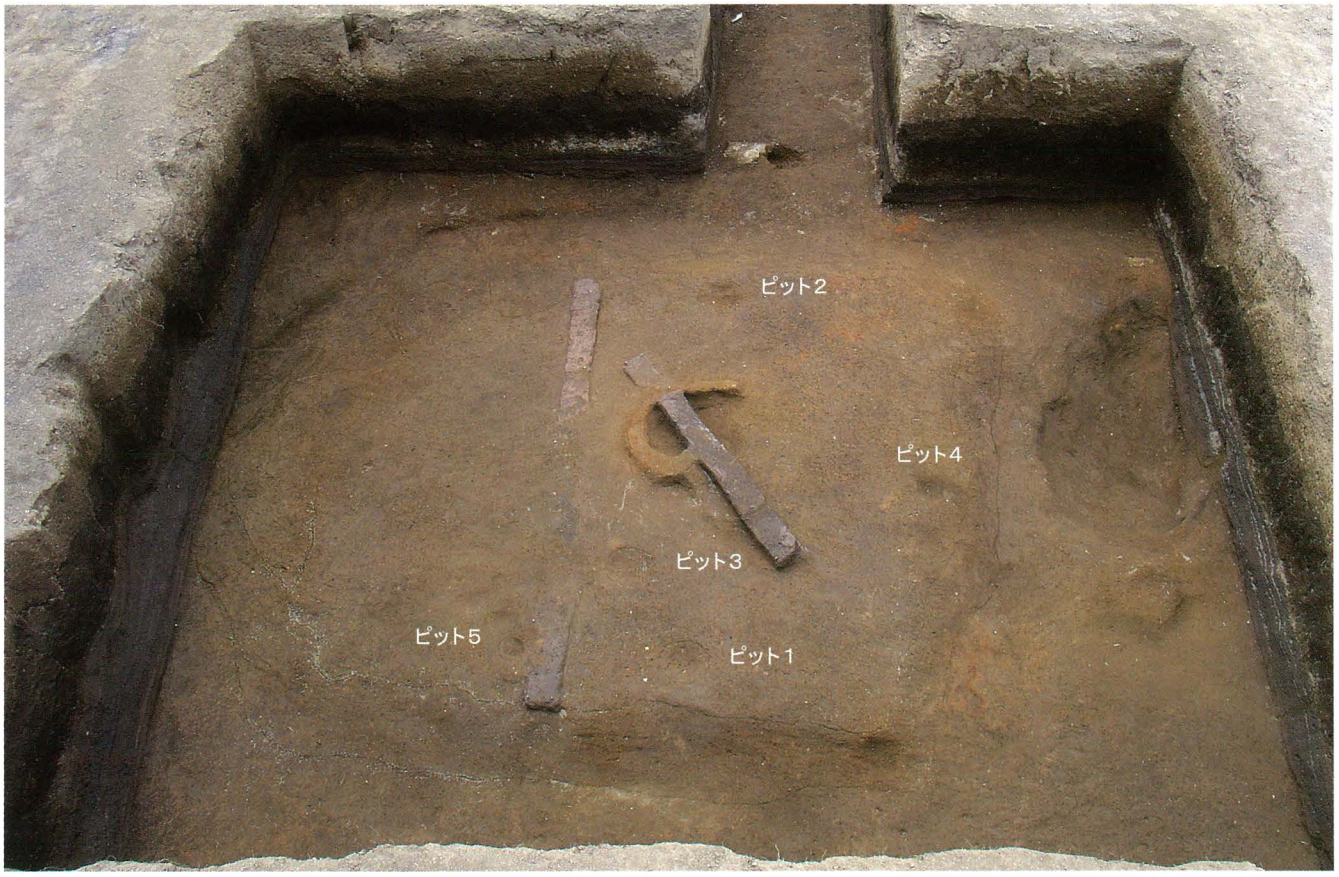
今後，中敷領地区の調査が進むことで 874 年段階の居住域の詳細がより明らかになっていくものと期待される。

1．調査区全景

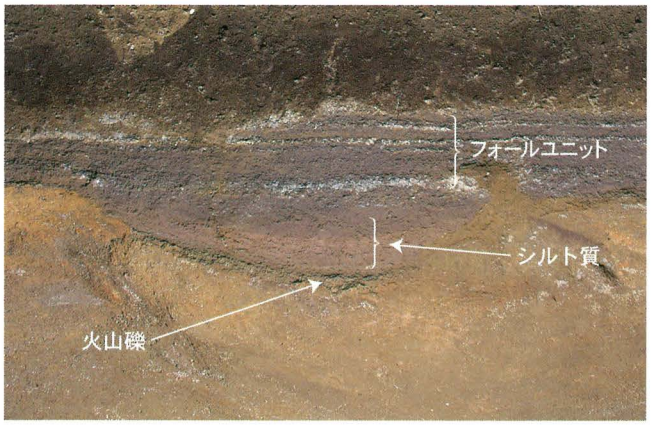
2. 東壁地層

3. 北壁地層

4. 壇状遺構検出途中の状況



5. 壇状遺構全景（北から）



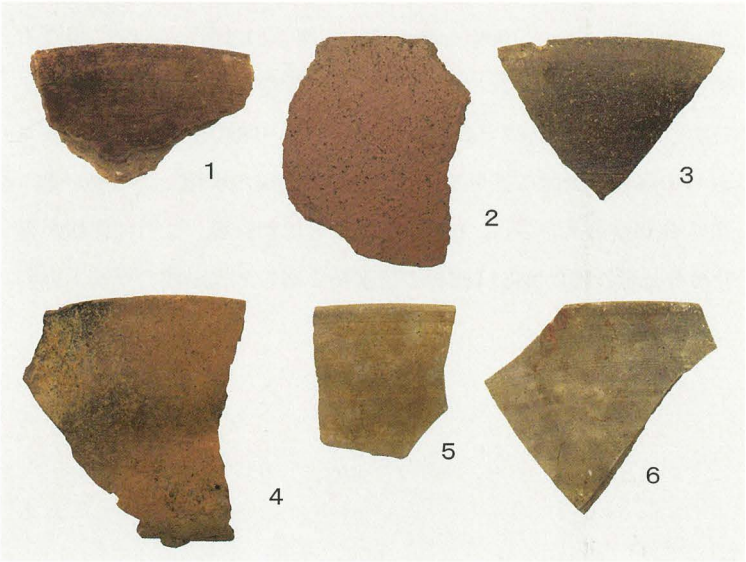
6．土坑断面

7．炉跡１

8．炉跡２

9．先行トレンチＡ

10．先行トレンチＢ



11．出土遺物

敷領遺跡地中レーダ探査

発掘調査に先立ち，東京工業大学大学院情報理工学研究科亀井宏行教授に地中レーダ探査を依頼，その結果を鑑みトレンチを設定した。探査は，亀井教授を中心に同研究室の今村太一氏，浅川洋介氏，宮崎皓一氏が参加した。以下に亀井教授よりいただいた探査結果報告を掲載する。

地中レーダ探査に用いた機器および実施日は以下のとおりである
使用機器：pulse EKKO PRO 500MHz(Sensors & Software 社)
探査日時：平成 21 年 8 月 24 日

今回の探査領域は図 1 に示すように 13m(東西)×21m(南北)の大きさで，地中レーダの測線間隔は東西方向，南北方向それぞれ 0.5m とした。本探査領域から西に約 50m の地点で住居跡および東西に走る道路状遺構が発見されており，道路状遺構がどこまで延びているかの確認と，新たな住居跡の発見を目的として，この領域の探査をおこなった。

図 2 に，レーダ断面図を示す。図 2(a)は，南から 2.5m 地点の東西測線のレーダ断面図で，図中の遅延時間 25~30nsec(深さ約 0.88~1.05m)付近に見られる反射が紫コラの層の反射であると考えられる。図 3 には，特徴的な TimeSlice 図（地中レーダ平面図）を示し，その様子を確認する。

図 3(c)は遅延時間 30~31nsec(深さ約 1.05~1.08m)の TimeSlice 図である。図中の黄円に着目すると，周囲に比べて弱い反応の部分が見られる。大きさは 3m×4m 程度の方形状である。これは 2008 年度の探査において住居跡が発見された際の反応と似ているため，この部分にも住居跡が存在するのではないかとの期待をいだかせる。しかしながら，この部分を横切る西から 7m 地点の南北測線の断面図を図 2(c)に示すが，南から 4~8m 付近では地表面直下から撹乱されていて，紫コラの層まで切れていることから，ゴミ穴のような後世の撹乱であると判断できる。

図 3(c)に戻って，赤円に囲まれた部分にも 3m×3m の方形の周囲に比べて弱い反応の部分が見られる。断面図を見ても，地表面からの撹乱ではなく，紫コラの薄い堆積も確認できるので，住居跡のような遺構ではないかと考えられる。

図 3(b)は，図 3(c)より少し浅い遅延時間 27~28nsec(深さ約 0.95~0.98m)の TimeSlice 図である。図中の赤円の部分にも，周囲に比べて弱い反応の部分が見られ，ここにも住居跡のような遺構が存在する可能性も認められる。

図 3(b)には，探査領域の西側 13~16m 地点から東側 2~5m 地点にかけて斜めに走る幅 2m ほどの強い反応（黄色の楕円で囲まれた部分）が見られる。2008 年度発見された西に約 50m 離れた地点での道路状遺構の延長に当たる可能性も考えられる。

図 3(a)はさらに浅い遅延時間 21~22nsec(深さ約 0.74~0.77m)の TimeSlice 図である。図中の赤円に着目すると周囲に比べて強い方形の反応が見られる。この部分を横切る断面図を用いてこの反応を確かめる。図 2(b)は南から 17m 地点の東西に横切る測線の断面図である。西から 5~7m 地点では周囲に比べて浅い部分に紫コラが堆積していることが確認できる（図中赤円）。同様に図 2(c)は，西から 7m 地点の南北に横切る断面図であるが，南から 14~16m 地点にかけて紫コラが盛り上がって堆積している様子が確認できる。これらの解釈を大胆に試みると，住居に火山灰が堆積し，屋根が重みに耐えきれず北方向に倒壊したものとも想像される。この住居跡の大きさは，6m 四方程度と思われる。ここに住居が存在していたと想定すると，図 3(b)で道路状遺構の延長であると思われた反応は住居の屋根から落ちた火山礫の堆積を捉えている可能性も考えられる。

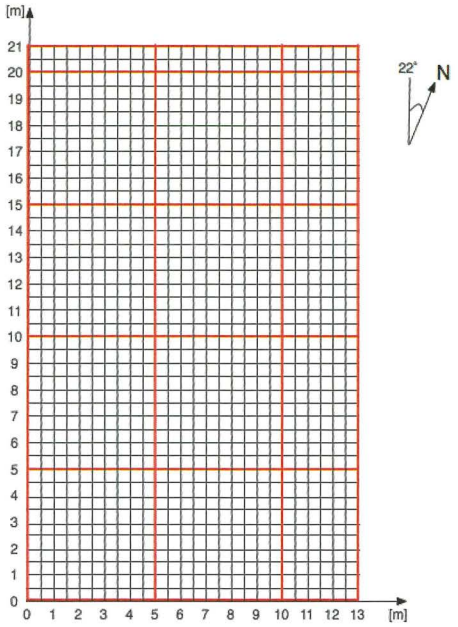
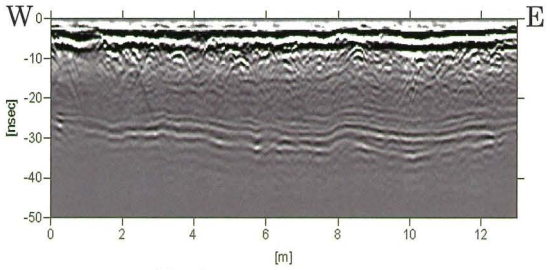
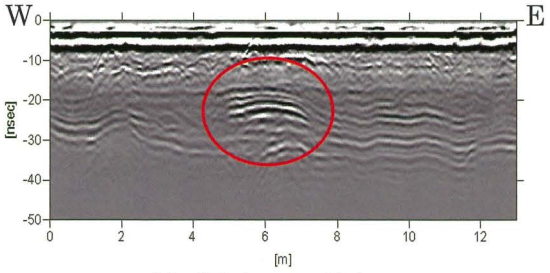


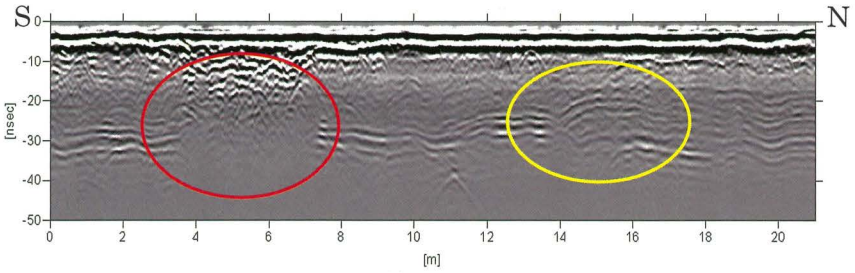
図 1 探査領域図



(a) 南から 2.5m 地点

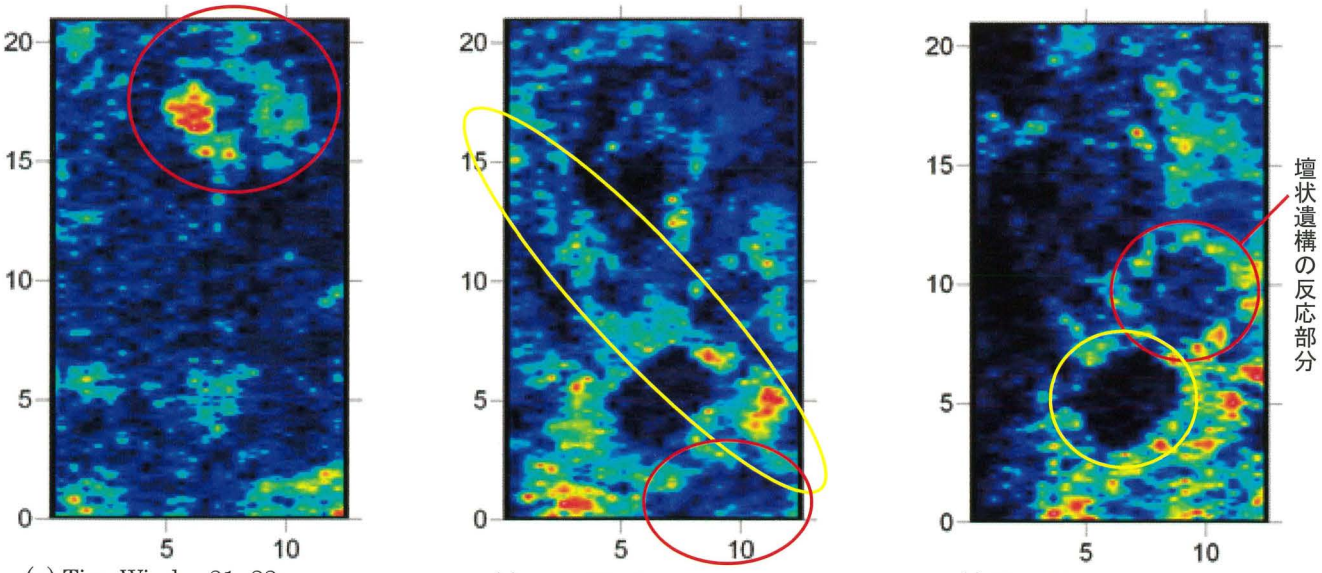


(b) 南から 17m 地点



(c) 西から 7m 地点

図 2 地中レーダ断面図



(a) TimeWindow21~22nsec

(b) TimeWindow27~28nsec

(c) TimeWindow30~31nsec

図 3 地中レーダ TimeSlice 図

■大園原遺跡編■

１．遺跡の概要

大園原遺跡は，指宿市西方大園原一帯に広がる弥生時代後期，縄文時代後期を主体とする遺跡である。遺跡は海抜 25m前後の台地上に位置する。

平成４年，宅地造成に伴い地下げが行われた私有地内から，建物を線刻した土器片が発見され一躍知られることとなった。

今回は，北指宿中学校の体育館新築工事計画に伴い建設候補地にそれぞれ４箇所のトレンチを設け確認調査を実施した。

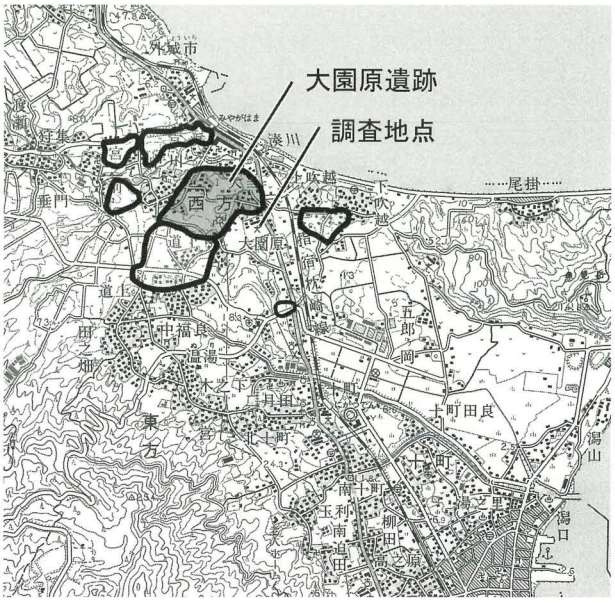


図11　大園原遺跡位置図

２．調査の結果

層位

１～４トレンチで確認された層位を述べる。

第１層は表土である。第２層は中世の時期に該当する黒色土層で 90cm 前後の堆積がある。第３層は紫コラの２次堆積層である。第４層は，奈良～平安時代の包含層である。茶褐色を帯びる上位の土壌と黒色を呈する下位の土壌に細分できる。

図12　大園原調査地点図（S＝1/3,000）

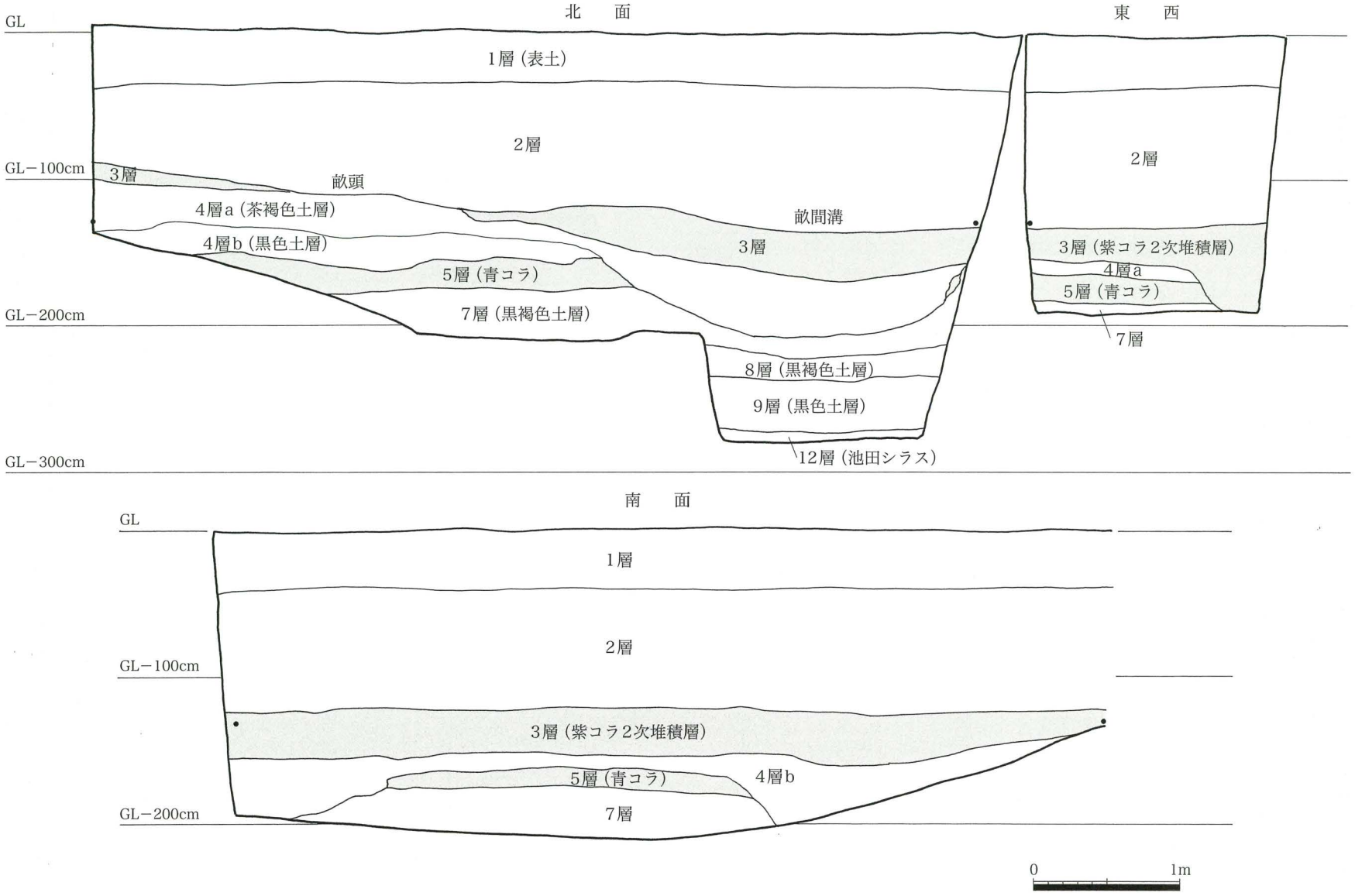


図13　大園原遺跡　1トレンチ層位断面図（S=1/40）

第５層は７世紀後半に比定されている開聞岳噴出物「青コラ」である。第６層は明褐色土層で橋牟礼川遺跡の第８層に相当する。第７層は，黒褐色土層で橋牟礼川遺跡の第９層に該当する古墳時代の包含層である。第８層も黒褐色土層であるが，赤褐色の粒子が混在する。第９層は黒色土層である。第10層は開聞岳の縄文後期の噴出物である「黄コラ」である。第11層は黒色土層である。第12層は池田湖火山灰である。

１トレンチ

敷地内北側に6.2×1.8ｍのトレンチを設け，現地表から約2.5ｍまで掘り下げ調査した。南西断面，及び北東断面で畝頭と畝間と見られる第４層の堆積状況を確認した。北東断面では，第５層・第７層をきって第４層が落ち込んでいた。断面の状況から畝頭の幅は約1.4ｍ，畝間の幅は約55cmを測るものと推定される。なお，遺物の出土は見られなかった。

２・３・４トレンチ

２トレンチでも，１トレンチ同様に畝間と見られる第４層の堆積が確認された。遺物の出土は見られなかった。

３・４トレンチでは遺構・遺物ともに確認されなかった。

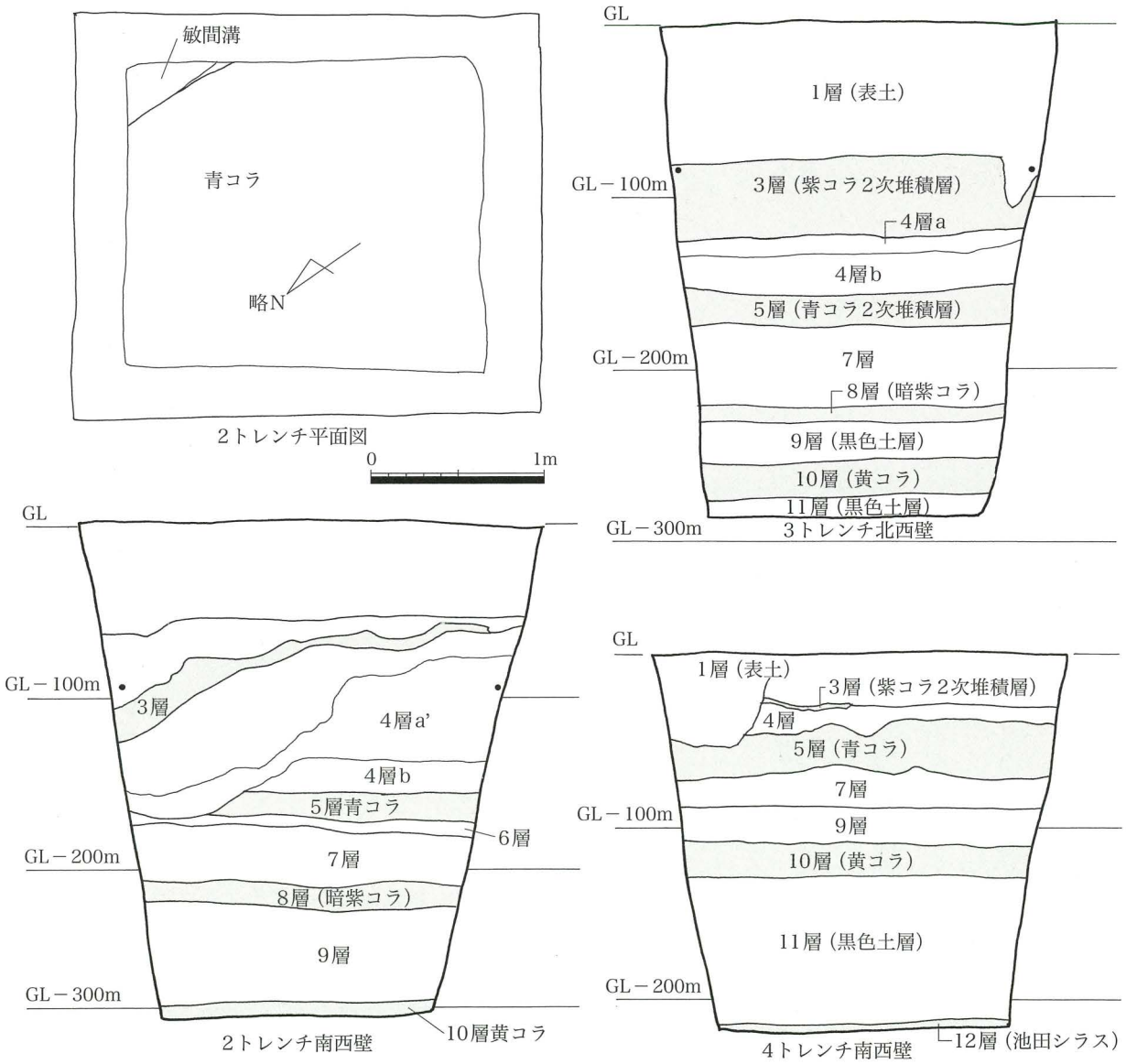


図14　2，3，4トレンチ 層位断面図（S＝1/40）

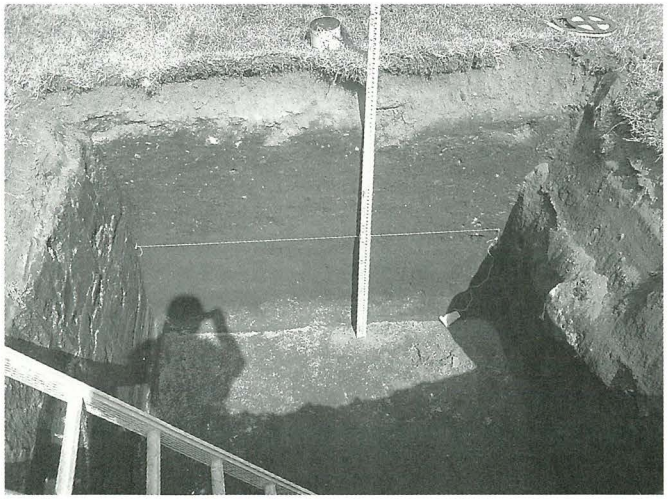
大園原遺跡図版

1．　1トレンチ北壁、畝間検出状況

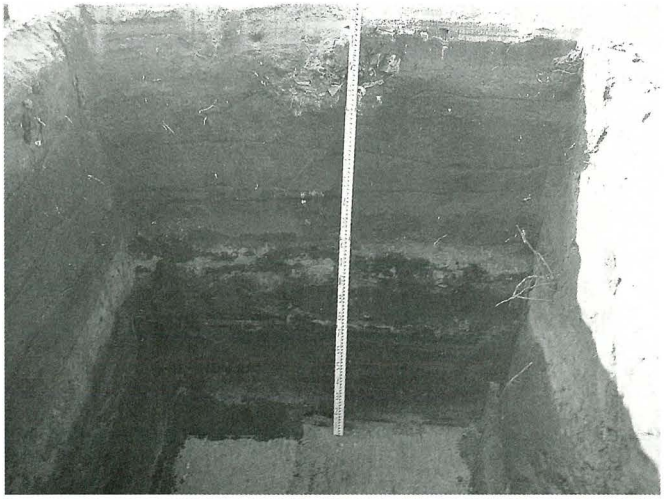
2．　青コラと畝間の状況

3．　1トレンチ北壁

4．　2トレンチ南壁、畝間検出状況



5．　3トレンチ北西壁



6．　4トレンチ南西壁

■山王遺跡編■

1．調査に至る経緯

独立行政法人国立病院機構指宿病院の官舎建設に先立ち，山王遺跡において確認調査を実施した。山王遺跡自体での調査履歴は無いが，近接する新番所後遺跡では，弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構・遺物が確認されている。

2．調査結果

官舎建設予定地に２箇所のトレンチを設け調査を行った。両トレンチで確認された層位を述べる。

第１層は表土である。当該地は山林だったため樹木の伐採による攪乱が激しい。第２層は，紫コラの２次堆積層である。第３層は暗褐色土層である。下部では，青コラの２次堆積物と混在する。橋牟礼川遺跡の第６層に相当するものと思われる。第４層は，青コラの２次堆積層である。

両トレンチともに遺構・遺物は確認されなかった。

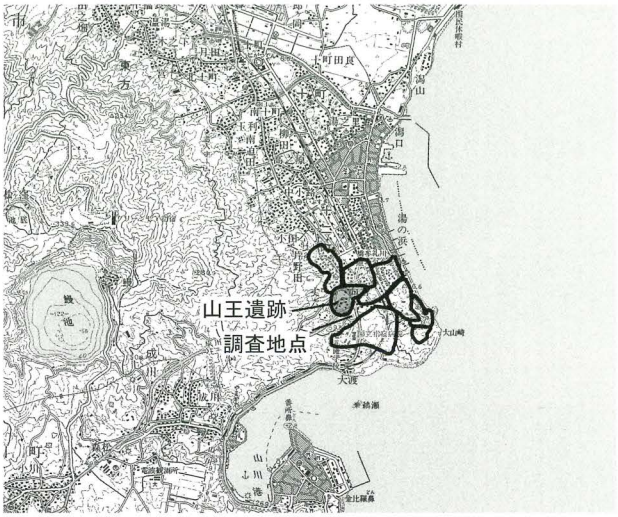
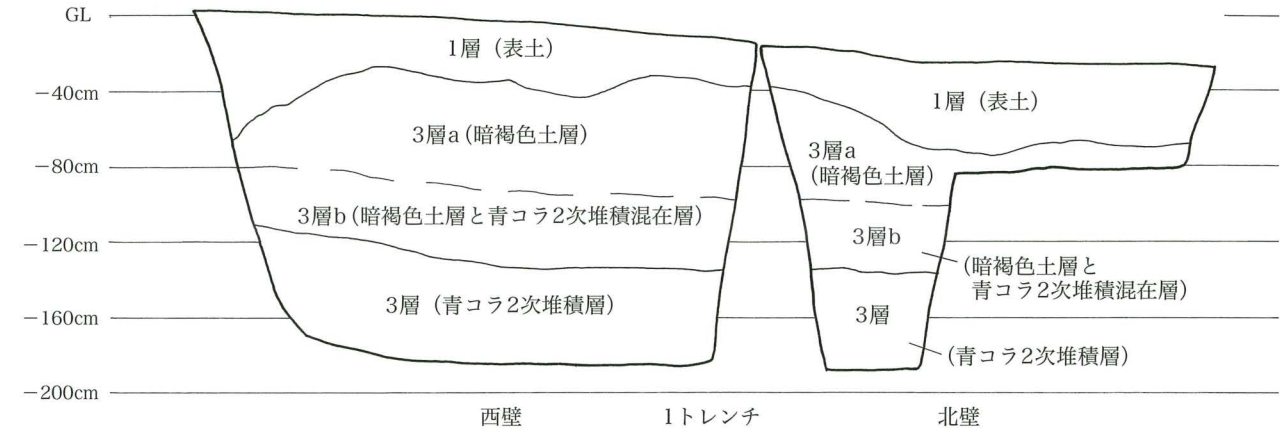


図15　山王遺跡位置図

1．１トレンチ調査状況

2．２トレンチ調査状況

図16　山王遺跡調査地点図（S＝1/2,000）



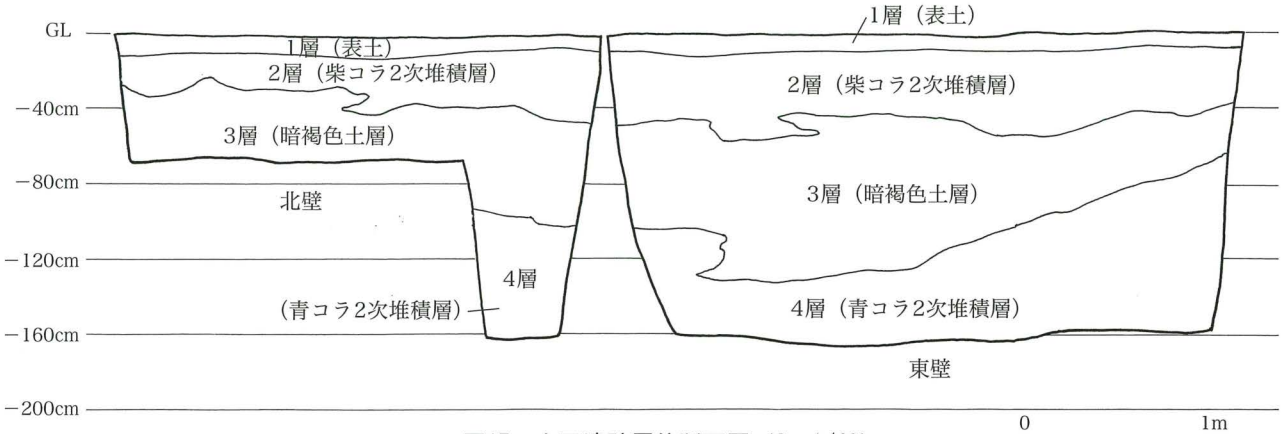
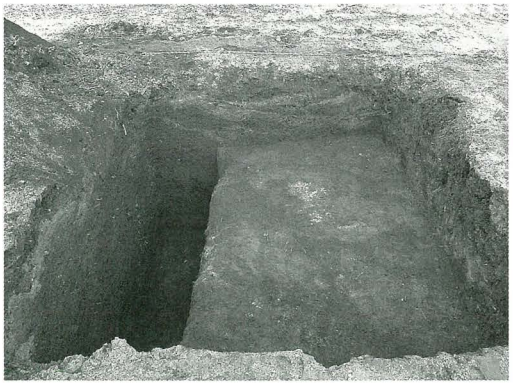
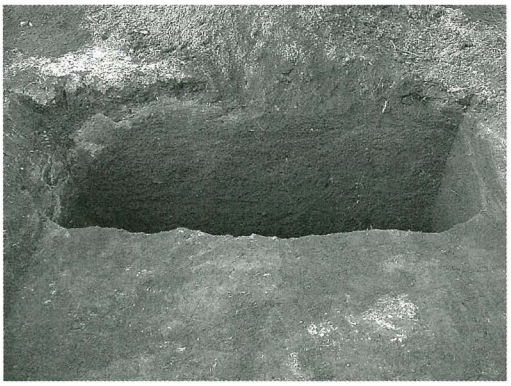


図17　山王遺跡層位断面図（S＝1/40）

0　1m



3. 1トレンチ南壁



4. 1トレンチ東面

5. 2トレンチ南壁

6. 2トレンチ東壁

■森山遺跡編■

１．調査に至る経緯

成川遺跡に隣接する森山遺跡地内において既存農道の拡幅工事が計画され，現状の畑地の矩面が一部掘削されることとなった。

遺跡の有無を確認するため，５箇所について試掘調査を実施することとなった。

２．調査結果

試掘調査の結果，いずれのトレンチにも黒褐色土層の厚い堆積がみられ，紫コラや青コラ等の開聞岳火山灰も確認されなかった。また，いずれのトレンチからも遺構・遺物の出土はみられなかった。

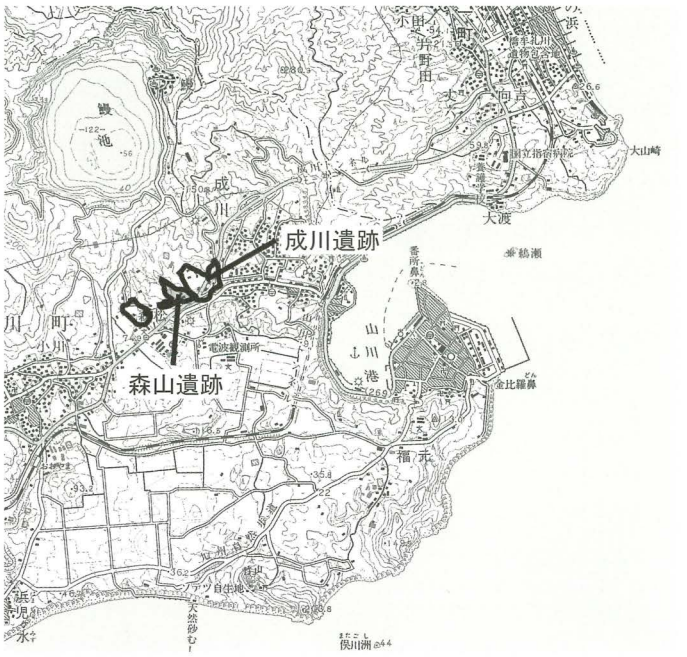


図18　森山遺跡位置図

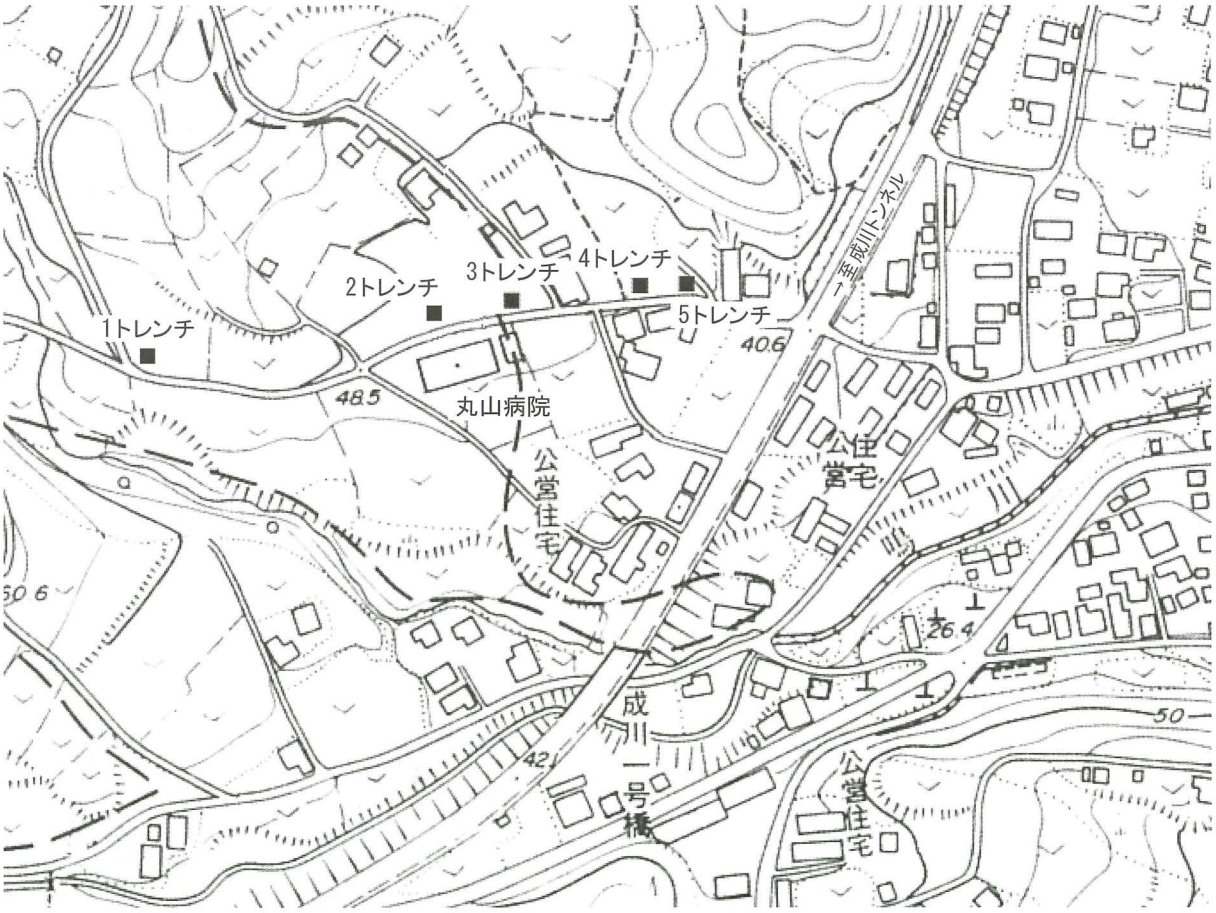


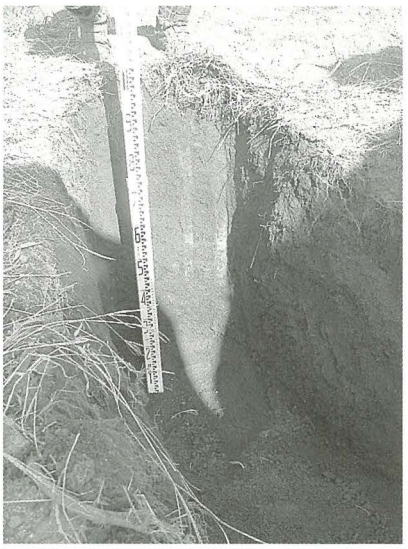
図19　森山遺跡試掘調査地点

森山遺跡図版

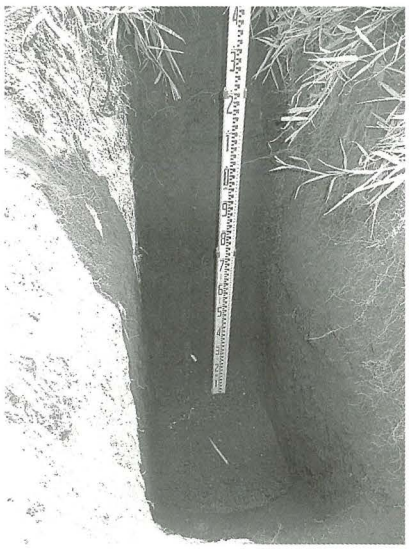
1. 試掘地点（４トレンチ付近）

2. 試掘地点（２トレンチ付近）

3. １トレンチ



4. ３トレンチ



5. ５トレンチ

6. ４トレンチ

7. ２トレンチ

表２　報告書抄録

ふりがな	しきりょう　おおぞんばる　さんのう　もりやま
書名	平成21年度市内遺跡確認調査報告書（敷領遺跡・大園原遺跡・山王遺跡・森山遺跡）
副書名	－
巻次	－
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第47集
編著者名	中摩 浩太郎　渡部 徹也　鎌田 洋昭
編集機関	鹿児島県指宿市教育委員会（指宿市考古博物館 時遊館ＣＯＣＣＯはしむれ）
所在地	〒891－0403　鹿児島県指宿市十二町2290　TEL：0993－23－5100
発行年月日	平成22年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
敷領遺跡	指宿市十町2230	46210	2－58			2009.8.6 ～2009.9.5	20 ㎡	市内確認調査（国庫・県費補助事業）
大園原遺跡	指宿市西方大当大園他		2－44			2009.9.30	20 ㎡	体育館建設
山王遺跡	十二町山王平他		2－36			2009.9.10	20 ㎡	官舎建設
森山遺跡	指宿市山川成川		20－10－0			2009.9.10	5 ㎡	道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
敷領遺跡	集落・生産遺跡・火山災害遺跡	奈良～平安	壇状遺構	土師器・須恵器	874年の開聞岳噴火で埋没した壇状遺構
大園原遺跡	集落遺跡 墓地	奈良～平安	畠跡	－	874年の開聞岳噴火で埋没した畠跡
山王遺跡	墓地	縄文・弥生・古墳	－	－	－
森山遺跡	集落	弥生・古墳	－	－	－

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第47集

敷領遺跡
大園原遺跡
山王遺跡
森山遺跡

2010年３月

【編集・出版】
指宿市教育委員会
鹿児島県指宿市十二町2290
TEL 0993－23－5100

【印刷】
有限会社丸山印刷
鹿児島県指宿市湊2－24－19
TEL 0993－22－2807